

コルプスとは何か

大田俊寛

コルプスの三つの意味

コルプスは今もなお、生き、作動している。その大きさ、肌の色、形姿を変え、しばしば他のコルプスを呑み込むことによって、その手足の数さえ増減させながら。その変容の様の甚だしさは、それらが同じコルプスに属するものであることを、観察する者に見失わせてしまう。しかしその外観がいかに多様に変化しようとも、それはやはりコルプスなのである。

コルプスの大きさや形姿は絶え間なく変化していくため、それを見る者の目は欺かれる。しかし、コルプスには背骨がある。三本の背骨が。その背骨に目をこらそう。そうすればわれわれはいかにその外観が変化しようとも、コルプスをコルプスとして認識することができる。コルプスという、この余りに多義的かつ多型的な概念。その主要な三つの意味は、次の通りである。

(1) 肉体。より端的には、死骸。

(2) 共同体、政治体、あるいは法人。

(3) 言語「法的なコードの集成体」。

第一の意味。コルプスという概念は、その直接の出所であるラテン語において、「肉体」を意味するありふれた一単語である。動物であれば、そして人間であれば、誰もが直ちにそれであるところの肉体。われわれは、みずみずしく輝いた、しかし同時に脆弱なそれを纏ってこの世に生まれ出る。そして年齢を重ねるにつれ、それは数々の傷を刻みつけられながらも、はるかに強靱なものに成長する。その運動は徐々に力強いものに、そして同時に繊細なものへと変化してゆく。しかし、肉体の発達は、次第に曲折を迎える。衰微が始まるのである。強靱な筋肉が緩む。目が霞む。髪が色素を失う。そしてついには、あらゆる人間に死が訪れる。肉体は腐臭を放ち、徐々にその組織は溶け、輪郭を失ってゆく。「あなたは塵だから、塵に帰る」。

全てが終わったかに見える。しかし、ここで目をこらそう。まだ何かが残っている。ここには二つのものが残っているのである。その一つは、柔らかい肉や暖かい血が消えてもそこに残る死骸、すなわち、爪や髪、そして歯や骨といった遺物であり、これらの存在は、過去にある人間が確かに生存していたということ、時間を超えて表象する。そして二つには、その人間が生きていたことを知る者たちが持つ記憶の存在である。死骸と記憶、これら両者は、相互に結びつく。死骸をどこかに捨て去ってしまつたのではなく、それを保存するための技術を練り上げること、特定の場所に埋葬すること、そして故人の記憶を想起するためのモノメントを作り上げること。こうして肉体が塵に帰った後、コルプスはなおも立ち上がり、第二の生を生き始める。

第二の意味。埋葬され、モノメント化されたコルプスの周りには、故人に関する記憶を留めた人々が参集する。それは主に彼の子孫たちであり、彼らは祖先のコルプスを中心に据えることにより、共同体を形作る。祖先のコルプスとどのようにに関わり、それをどのようにに祀るか、それが彼らにとって最も「公の事柄 *res publica*」となる。政 ^{politica} を中心とするそのような共同体は、宗教的であると同時に政治的な組織体を意味しているのである。またそこでは、祖先の行いや言葉が、共同の記憶として保持される。年月を経るにつれて、生前の祖先に直に触れたことのある者たちは、次第にその姿を消していくことだろう。

しかし、モノメントとして定礎された祖先の形象は、今や容易に失われてしまうことはない。その記憶は世代から世代へと伝承され、そしてむしろその過程で、より純粋な理念的存在へと昇華＝崇高化されていくことだろう。祖先の業に関する崇高化された記憶は、共同体の成員に対し、そのあるべき生き方や振る舞いを照らし出す鑑 ^{かがみ} となる。彼は今や、共同体にとつての「*persona moralis*」に、すなわち「倫理的な人格」という理念的存在になると同時に、「法人」という制度的存在になつたのである。

第三の意味。衰えと死を免れえず、やがては朽ち果てていくほかない「肉体」という存在から、人格の理念的な形象であり、永続的制度化を有した「法人」へと変転するコルプス。優れて対極的とさえ思われる上記の二つの意味を架橋している存在が、コルプスの第三の意味、すなわち「言語」としてのコルプスである。すでに述べたように、死して朽ちた祖先の形象が永続性を獲得しえたのは、彼の子孫からなる共同体によってその記憶が保持されたからであった。そしてそのような記憶の伝承は、基本的には言語によって担われる。例えば彼の墓石には、その名前と来歴が、文字として刻み込まれることになるだろう。また他方、彼の行いは伝記として記録され、彼が口にした言葉は集積・編集されて、一つの資料体 ^{コーパス} を構成することになる。石碑、舞踊、入墨、詩、歌謡、演劇、そして書物。記憶の伝承の様式は各文化によって千差万別でありうるが、それらの様式を根柢

で支えているのは、まさに言語としてのコルプスなのである。

死に、すでに朽ち果てた祖先の肉体のコルプスは、言語的なコルプスを介し、彼の子孫たちからなる共同体のコルプスへと再び受肉する。祖先の言語的なコルプスは、共同体において新たに誕生した各成員にとって、その意識に先だつてすでに存在し、それは言語の習得と共に不可避的に、各成員の肉と魂に食い込む。言語によつてその意識を目覚めさせられるとき、彼は幾分かは自らの祖先の目によつて世界を眺めているのである。

言語の機能、殊にその否定性の機能、無を指し示す機能は、「死が存在する」ことを彼に教える。その肉体は熱を帯び、脈は律動を刻んでいるが、言葉を話す彼はなお生きているその時ににおいて、自分の肉体がやがては無へ帰ること、死を迎えるということを知っている。その目で眺める彼自身の肉体はすでに二重化しており、生きて脈打つその肉体には、死んだコルプスの姿、死骸としてのコルプスの姿が二重写しになっているのである。

言語としてのコルプスは、しかし、彼に死を教えると同時に、死を越えて生きる方途をも教える。その方途とは、今生きている肉体に槌りつき、死んだコルプスをその身から引き剥がそうとする不可能な試みに出ることではない。そうではなくむしろ、コルプスへの主体的な同一化を図ることである。無から有を生み出すことのできる言語の機能、その仮構フィクショナル的な機能によつて、制度的なコルプスである法人を創設し、維持すること。そして、

その永続的なコルプスを分有し、その四肢に成員として自らのあり方を位置づけること。彼の肉体にまわりつく死せるコルプスは、こうして彼が死を越えて生きることをも可能にする。

肉体に死骸としてのコルプス、共同体としてのコルプス、言語としてのコルプス。これらコルプスの三本の背骨は相互に絡みつき、太く強靱な一本の背骨へと生成する。そしてこの背骨は、その巨大かつ不死の身体を支え、幾度も立ち上がらせるのである。

キリストのコルプス

コルプスは、そこに人間が生活しているあらゆる時代と地域において、常に生き、作動している。コルプスたちの系譜は、その活動の舞台を徐々に移しつつ、連続と継続しているのである。しかし、数多く存在するこのようなコルプスたちの中でも、特別な注目を受けるに値する一つのコルプスが存在する。それは、キリストのコルプスである。

キリストのコルプスといふこの比類なき巨大なコルプスは、古代末の地中海世界において誕生した。その誕生を準備したものは、大別して二つ存在する。それは、ヘブライに由来する一神教の伝統と、ギリシャに由来する形而上学的な思弁である。

まずは端的に問おう。キリストとは何者か？ それは、あらゆる人類にとつての共通の祖先である、と言つことができる。

多くの民族宗教の神話や教義においては、その民族の始祖の姿が描かれており、それはヘブライ民族の宗教であるユダヤ教にとつても例外ではない。ユダヤ教の聖典は、最初の間人アダム、およびそれに続く族長アブラハムやモーセといった、ヘブライ民族の祖先たちと、神ヤハウェとの関わりを描き出している。そして、歴史上の一人物である限りの「ナザレのイエス」は、ヘブライ民族の一人として生まれ、ユダヤ教徒として生き、十字架での磔刑を受けることによって、その短い生涯を遂げた。彼の人生はここで終わり、槍に貫かれたその肉体は潰え、全ては塵に帰るはずだったのである。

しかし、誰もが知るように、新しいコルプスがここから立ち上がる。キリスト教の成立である。その教えによれば、キリストとは、神を父として持つ「子なる神」であり、同時に、アダムにさえ先だつ全人類の始祖である。始祖、という表現がいささかの違和を残すようであれば、祖型、と言い換えても良い。初期のキリスト教神学者・思想家である教父たちは『創世記』の記述を大胆に解釈し、人間がそれにかたどつて創造された「神の像^{イマゲ}」とは、万物の創造以前に、父なる神と共に存在したキリストである、と唱えた。しかしキリストという神の像にかたどつて創造された人間は、その後、原罪を犯すことによつて神から離反してしまふ。そしてキリスト教によれば、キリストが一人の間人として受肉したのは、人類を救済へと導くためであ

り、特にその十字架上での死は、人類の原罪を贖うためのものであつた。さらにその死んだ肉体は、地に埋められることによつてそのまま土に帰つたのではない。キリストは死から復活し、天上の父なる神のもとに引き上げられたのである。

死の淵に沈み、しかしそこから甦つたキリストとその肉体。ゆえにキリストの墓は存在していない、そこはすでに空だつたのだから。ここでキリスト教は、祖先であるキリストと、その子孫である人類を結びつけるために、極めて効果的な儀礼の様式を開発する。それは、パンとブドウ酒がキリストの眞の血肉へと聖変化し、それを食することによつて信徒たちがキリストの身体に与るということを旨とする、聖餐礼である。この儀礼はまず何より、福音書に描かれたその一面、すなわち「最後の晩餐」の再現を意図している。最後の晩餐においてイエス・キリストは使徒たちに、「これは、あなた方のために与える私の体である。私を思い起こすため、このように行いなさい」(ルカ 22:19)と言つてパンを食べさせ、「この杯は、あなた方のために流す私の血で立てられる新しい契約である」(同 22:20)と言つてブドウ酒を飲ませる。その背景としてユダヤ教の過越祭(子羊の奉獻による祭礼)が設定されていることから分かるように、最後の晩餐の一面は、キリストによる供儀の様式の定礎を意味している。キリストの肉は彼らに供されるために捧げられ、そしてその血は、新しい契約のために流される。キリストは人

類のために、自らの肉体を奉獻するのである。そしてその儀礼を繰り返すとき、人々は再びキリストの言葉と業を想ファンキエス起リスすることができるようになる。

キリストによる自らの肉体の奉獻と、信徒によるその共食。

これについてパウロは次のように述べている。「私たちが割くパン、それはキリストの体と与ることではないか。パンが一つであるから、私たちは多くいても、一つの体なのである。全員が一つのパンを共に食するからである」(一コリ 10:16-17)。キリストの肉体の共食によって、儀礼に参与する人々がその四肢(membrum)と化し、教会という共同体の成員(membrum)となること。キリストは全人類の祖先であるがゆえに、民族や人種を分け隔てることなく、聖餐の儀礼に与る全ての人々の間に神的な交ミステリ流スを成立させる。こつして「一つの体の分有による共同体の結成が、祖先を同じくする共同体の結成が可能となる。その末期、古代社会の都市的共同体が崩壊に瀕していく中で、キリスト教のこのような論理は、中世から近世へかけて、さまざまな共同体や法人組織を成立させる基盤となったのである。

またさらに、キリストとは、言葉ログス、受肉した神の言葉ログスでもある。周知の『ヨハネ福音書』序文によれば、「初めに言葉があった。言葉は神と共にあった。この言葉は初めに神と共にあった。すべてのものはこれによってできた」のである。ログス＝キリスト論は、ギリシャ哲学に由来するログス論を移入することに

より、キリストという存在に形而上的かつ宇宙論的な位置づけを与えた。キリストは、先に述べたように、始原においてすでに神と共にあり、その存在は物質的な世界を越え、それに先立つ。むしろキリストは、神の言葉として、神と共に世界の全てを創造したのである。

ギリシャ的な形而上学の思弁を媒介に、ユダヤ教的な一神教を徹底化することによって、キリスト教は民族のあるいは地域の共同体を越えた、新しく巨大なコルプスを立ち上げることを可能にした。しかし、形而上学的な普遍理論と、民族的歴史性の結合をも意味したこのような試みは、周囲の諸文化との間に少なからず摩擦を発生させることになる。その際の大きな問題の一つは、形而上的存在である神なるキリストが、なぜナザレのイエスという一人の人間として受肉し、さらには磔刑を受けることによって死ななければならなかったのか、ということである。ギリシャ＝ローマ的な教養を持つ人々から、初期のキリスト教は概して、非合理的な教説を弄する新興宗教と見なされていた。

初期キリスト教の敵対者たちの中でも、正統主義と同様にヘレニズムとヘブライズムの融合を企て、キリスト教の内部に入り込みその大きな脅威として現れたのは、グノーシス主義的な諸異端である。グノーシス主義は、「仮現論」と呼ばれる性質のキリスト論を、極度に推し進めた。その教説によれば、形而上

的な実体を有するキリストが物質界で受肉や受難を経験するということは原理的にありえず、それらの出来事は「そうであるかのように見える」幻影に過ぎない。イデア的存在であるキリストは、可視的世界において、人々の目を欺きさえする多様な形姿を纏って現れるのである。そして真の知識を有する者たちは、神の多様な現れの背後に、その真の姿と隠された使信を読み取らなければならない。彼らは「隠された神の使信」の名の下に、新しい聖文書を積み上げていった。

キリストの受肉と死の現実性を否定し、さらには聖典の枠組みを攪乱させるグノーシス主義の運動に対して、キリスト教教父たちは反駁した。キリストは現実には受難などしていない、それを真似ようとして軽率に命を捨てるなど愚かなことだ、と信徒たちの殉教をも揶揄するグノーシス主義者たちの見解に対して、教父エイレナイオス（一三〇頃～二〇〇頃）は激しい憤懣の感情を隠していない。「ところで仮に自分は苦難を受けず、イエスから飛び去ることになっていたら、弟子たちに十字架を取って自分に従うようにと励ましたのは一体どついついことであるのか」（『異端反駁』Ⅲ:185）。むしろ真実の神の言葉であるがゆえにキリストは受難し、そしてその伝承を担う使徒たちや信徒たちもまた、激しい迫害にさらされる。しかし神の言葉は、多くの人々の死を乗り越えつつ確実に伝達されていく。ここではそれを詳論するだけの余地がないが、四つの福音書を核とする

新約聖書の構成、さらには旧約聖書をも含み込む聖書全体の構成は、これら諸異端との論争の過程で、徐々に練り上げられたのである。

エイレナイオスによれば、真のグノーシスとは、旧約の預言者から新約の使徒を通じて、改変を加えられることなく守られてきた聖書の言葉であり、そして今や世界中に広がった、教会の古からの組織体である。「教会は絶え間なくその肢体を切り取られるが、直ちに肢体を増やして全きものとなる」（同 Ⅳ:39）。イエスの死の意味を、神の言葉としてのキリストを焦点に置くことによって新たに照らし出すこと。さらには、そこから得られるパースペクティブに基づいて人類の歴史全体を再解釈し、聖書の枠組みを画定すること。そして、キリストによる肉体の奉獻という儀礼行為に基礎づけられ、人々の生と死を巻きこみながら新陳代謝してゆく、強靱な永続的共同体として教会を組織すること。キリスト教神学が描き出す「キリストのコルプス」には、コルプスのあの三本の背骨が、絡み合って存在している。

磔刑の喧噪の中、鋭い槍に刺し貫かれ、血の匂いと粉塵にまみれて潰え去ったキリストの死骸。ここからあの巨大なコルプスが立ち上がってくるといふことを、果たして誰が事前に予見しえたであろうか。しかし実に、「キリスト教共同体 *Corpus Christianum*」と後に総称される中世ヨーロッパの社会は、余

りに矮小な、とも言いうるこの「キリストの死骸」をそのもつとも基底的な足掛かりにすることによって、その巨大な身体を支えたのである。キリストのコルプスは四肢の数を増やし、その何本もの手を社会のさまざまな領域へと延ばしていく。神の言葉の集成体としての聖書というコルプスは、それを注釈する教父や神学者たちの諸文書や、さまざまな決疑論に対応するための命題集というコルプスへ。あるいはローマ法の伝統と結合した、教会法という法的コルプスへ。「キリストの身体の分有」というパウロ的観念は、数多くの教会や修道院を成立させる基となり、そしてキリストに倣い殉死した信徒たちは、聖人としての崇拜を受け、村落共同体や職業組合の核となる象徴的存在としての機能を果たすことになった。しかし、中世を支配したその巨大で複雑な組織体を解剖するという、素描のみでも膨大な労力を要する試みはここでは断念し、別の機会に委ねなければならぬ。

コルプスたちの相克

時が中世から近世へ、さらには近代へと至り、キリストというこの余りに巨大なコルプスは、その四肢を一つずつもがれ、やがて死に絶えた、かに見える。しかしここで、再び目をこらそう、なぜならわれわれは、コルプスが容易には死なないこと、否、むしろその死から新しく豊饒な生の力を汲み出すことによ

り、再び立ち上がることを知っているのだから。そう、コルプスは今もなお、生き、作動している。その姿と形を絶え間なく変化させながら。しかしかつてのキリストのコルプスの形姿を、微かに留めながら。

今や何が見えるだろうか。その風景は、実のところさして変わり映えしない。見えているのは相変わらずコルプスの姿、なおも作動し続けている無数のコルプスたちの姿である。その規模は、かつてのキリストのコルプスに比べればいささか小さい、しかし、その機能や役割を巧みに特化することによって、より機敏に動き回り、絶え間なく誕生と死滅を、分裂と融合を繰り返している。

近代社会に存在する数多くのコルプスたちの中で比較的大きな規模を保っているのは、国家というコルプスである。上述の中世的な「キリスト教共同体」において、キリスト教信仰が徐々に分裂の様相を色濃くし、社会的な安定よりもむしろその騷擾をもたらすケースが増えるようになると、国家はキリスト教神学から「主権＝至高性 *sovereignty*」という概念を半ば強引な仕方で継承して自らの頭に冠し、社会の中心的な位置を教会から取って代わるに至った。しかし、このような新しい共同体もまた、コルプスの基本的なロジックから離れて存立しうるわけではない。そこでは、法的体系や、「国民 *nation*」の来歴を物語る集成体を含む、言語の全面的な再編成という困難な課題



ホップズ「リヴァイアサン」口絵に見られる王の身体。その四肢は無数の人々から構成される。

を引き受けることを余儀なくされた。また同時に、ホップズ『リヴァイアサン』の口絵にすでに示されているように、国民国家という共同体の人格性を一身に体现する象徴的人間の存在も不回避的に要請され、そのようなコルプスは、多くの人間の生死を自らの内部に巻きこみつつ今もなお存立し続けている。

極めて活発な運動によって特に目を引く新しいコルプスは、会社というコルプスである。資本の結集と法的な認可によって容易に製造されるこの人工的な人間たちは、その大きな者ともなれば、今や複数の国家を軽々と跨ぎながら世界的規模で活動している。刻々と変動する流行やニーズに適應するために、自らの肢体を切断・融合させることによって、その形姿を絶えず変化させながら。しかしながら、「コーポレーション corporation」あるいは「カンパニー company」（＝パンを共

食する者）というその呼び名が暗示しているように、その現代的な装いの背後で機能しているのは、原始的とも言いうるコルプスの論理である。その一側面として、資本主義における禁欲のあり方に、修道院との相同性を認めたウエーバーの知見を想起してみても良いだろう。種々のエンブレムによって表象される、法的に仮構された人格に向けて自らの労働を捧げ、しばしば創業者の人格とも不可分に融合している「企業理念」の文言に照らして、自らの精神性を研修していくこと。その姿には依然として、あのコルプスの三本の背骨が、確かに透けて見えているのである。

中世から近代にかけて「キリストのコルプス」が解体していくのを目にし、いささか軽率な論者たちは、コルプスそのものが歴史的使命を終えたかのように錯覚してしまった。しかし最後に繰り返そう、コルプスは今もなお、生き、作動している。その肩に乗ることによって世界を見渡せるような大きなコルプスは失われてしまった、しかし、コルプスの論理そのものが消失したわけでは全くないのである。家族というコルプス、会社というコルプス、国家というコルプス、その他諸々のコルプスたちが、相互に支え合い、あるいは相互に喰らい合うことによって、今もなお動き続けている。そして現代のわれわれが見ているものもまた、その形姿の絶えざる再編の一過程なのである。